

## なからぎ

176号

2006年7月

## 「連戦連敗」に学ぶ

教務部長 久保康之

建築家、安藤忠雄の「連戦連敗」という著書を読んだのは数年前のことである。なんともいえない閉塞感を感じていた中で、この本のタイトルが目にとまった。国際的な名立たる賞を授与され、その地位を確たるものとした稀代の建築家が発するタイトルに込められたメッセージが逆説的であり、何か救いを感じたからである。当時、安藤忠雄は東京大学工学部の教授であった。よく知られているように、氏は大阪の下町に育ち、高校卒業後、大学には進学せず、独学で建築を学び、今を築いた。この本は氏の東京大学での大学院の講義をまとめた体裁になっている。建築デザインの内容、思想史などが展開されるのであるが、そこに氏の人生観、学びの歴史が込められている。いわゆる日本の大学のヒエラルキーの中で頂点にいる学生に対して圧倒的なエネルギーと説得性で講義を展開する。その力はどこから来るのだろうか。大学教師としての素朴な問であった。その答えの一つに独学というバックグラウンドが学びという行為を純化したからではないかと考えた。学びを純化するとは何か。氏は食事を抜きにして書籍代にあて、読書に没頭したという。この言葉にいたく感動したが、こうした一意専心の行為をいうのではない。自らの存在をかけ、時代に対して自己の取組むべき主題を見出すこと。そしてあくまで現場から離れず格闘する。この行為が極めて洗練されて為されていることにあるのではと。

そもそも大学の淵源ともいわれるプラトンのアカデメイアは、教師と学生が対等な立場で対話、対論を交わすことが教授法の基本であったと聞く。主題の共有とそして師弟の現実との格闘こそがアカデメイアそれではないかと思う。

現代は主題なき時代であるという。高度成長期の社会が発展し、人々が前向きに生き、もがく中で格差や社会問題と対峙せざるを得なかった時代とは違う。一見満たされた生活感覚と時代が抱える問題との体感の部分での乖離が主題を見え難くしていると思う。京都府立大学は文化揺籃の地、京都にある伝統ある大学である。そして、教員と学生の顔が見える大学である。現代におけるアカデメイアたる素地があるように思う。

「連戦連敗」には珠玉の言葉が溢れている。独学という行為が学びを純化するというのは私が大学教員としてこの本で感じた逆説であるが、安藤忠雄が最も気にしている建築家ルイス・カーンの「創造とは逆境の中でこそ見出されるもの」という言葉には率直に希望を見出したように感じたのである。

(くぼ やすゆき：農学研究科教授)

ご紹介の『連戦連敗』 東京大学出版協会 2001刊 (請求記号 520.4ⅡA) は2階閲覧室入り口の新书推荐コーナーに配架していますのでご利用ください。

## Word Grammar と論集の出版

図書館運営委員 菅山謙正

私が専攻している言語学の世界にもいくつかの学派がある。大半の学問分野がそうであるように、大きく分けると、アメリカとヨーロッパの2つの学派に別れる。アメリカの言語学は、一言で言えば、MIT (Massachusetts Institute of Technology) のNoam Chomskyが創始したMIT学派(MIT School of Linguistics)に代表されると言っても過言ではない。(注) もちろん、それ以前にもアメリカン・インディアンの言語を対象にした構造主義言語学の研究もあった。しかし、その業績をはるかに凌ぐほどに、Chomskyは1950年以降の言語学研究にいわば革命を起こした。しかし、「盛者必衰の理」が予測するごとく、ここ20年位前からアメリカ、あるいは世界的な規模で、言語学の様相も大きく変わってきた。認知言語学・認知文法の台頭である。周知のように、アメリカは広大な国であるが、学問的にもまたその包容力が大きい。このことは言語学の分野にも当てはまる。というのは、Chomskyの理論と競合しながらも、アメリカの各地にはChomskyとは異なった接近の仕方をする言語研究が多数存在し、盛んに研究が行われてきたからである。そして、そのような多様な考え方をするアメリカの言語学者の中にはもともとChomskyのもとで研鑽を積んだ彼の直弟子がいることも面白い。ひとつの理論的枠組みが何年かのサイクルで学界の主流を占める我が国とは学問的な自由度が大きく違う。

さて、目を大西洋の反対側ヨーロッパに転じてみよう。Londonにもかつてロンドン学派(London School of Linguistics)と呼ばれる言語学派があった。私は、学部4年の時、このロンドン学派の言語学を学びに1978年7月から1年間、奨学金を得てロンドン大学を構成するひとつのCollegeであるロンドン大学東洋学・アフリカ学部 (School of Oriental and African Studies [SOAS], University of London)

言語学科へ留学した。その後、1985-86年にはBritish Council FellowshipでUniversity College London[UCL]へ、1990-91年再びUCLへ、1996-97年はUniversity of Manchesterと、あわせると4回英国へ赴いた。

最近はLondonにも、いや、英国の言語学界全体にアメリカの影響が強く見られる。例えば、Oxfordでは意味論を専門とするアメリカ人の言語学者HigginbothamがProfessor of Linguisticsとして活躍していた(1993-2000)。他にもアメリカ出身の言語学者が英国の大学の言語学科で重要な地位を占めていた例が少ない(e.g. Prof. Joseph Emonds in Durham (1992-2000))。このような状況のLondonで、J.R. Firthによって創始されたロンドン学派の流れを汲みながら、意欲的に独自の言語理論Word Grammar (以下、WGと略す)を展開しているのが、私のUCLでのSupervisorであったProfessor Richard Hudsonである。私は彼を1978年から知っているから、かれこれ30年近い付き合いである。その彼も2004年の夏に退官し名誉教授になっているので、現在、LondonでFirthの流れの末端にいるのはUCLにいるRelevance TheoryのDeirdre Wilsonだけである。

Richard A. Hudson (彼自身はDickと呼ばれるのを好む)は一貫して、いわゆる変形生成文法に替わりうる普遍文法のモデルを追求している英国言語学界の重鎮である。1997年より2000年まで英国言語学会会長 (President of the Linguistics Association of Great Britain)も務めている。Cambridge大学出身の彼は、ロンドン大学でPhDを取り、1960年代に当時ロンドン大学の言語学教授であったM.A.K. Hallidayの研究助手となった。彼は、このHallidayによって体系文法 (Systemic Grammar) の洗礼を受けた。その後、1970年代に入って、J. Anderson の格文法 (Localistic Case Grammar)、L. Tesnièreの依存文法

(Dependency Grammar) を研究し、その成果が1976年に *Arguments for a Non-Transformational Grammar* として発表された Daughter Dependency Grammar (DDG) である。彼は非変形文法の研究をさらに続け、*Word Grammar* (1984)の中で組織・体系化した。そこで発表されたWG理論をさらに洗練し、より精緻なものにして、一応の完成の域にまで達成させたのが1990年に刊行された *English Word Grammar* である。

Dickはその旺盛な意欲で膨大な量の著作を著し、internetのHPでも発信している(彼の個人的なHPは、<http://www.phon.ucl.ac.uk/home/dick/home.htm>)。彼は目下WGの3冊目を執筆中で、まもなくOUPから出版される。

しかし、何と言っても、言語理論を世界に広め、その支持者を増やすためには、その理論的な枠組みで、さまざまな言語の仕組み、現象が説明できることを実証した論文を集めた研究論文集を欧米の出版社から出すに限る。この構想を私が持ち始めたのは、1996-97年の1年間、Manchester大学言語学科にVisiting Scholarとして滞在していた時である。この時私は、毎週火曜日、片道2時間半かけて電車でLondonのUCLで開かれていたWord GrammarのworkshopにManchesterから通っていた。

Dickにこの計画を話すと彼は非常に喜んだ。そして、立所に、彼と私のほかに、世界各地でWGを進化させているChet, And, Nik, Eva, Jasperと、私の教え子でEssex大学でPhD in Linguisticsをやっている前川君の8人が9本(筆者が

2本)の論文を書き、それぞれを章にして9章からなる論集の構成がまとまった。完成原稿が出揃うのに数年を要したが、私は言語学で有名な欧米の出版社にbook proposalとsample chapterを送った。幸いLondonのContinuum社の言語学の編集責任者Jennifer Lovelから出版の申し出があり、契約を2004年6月に結んだ。最終原稿は約束通り2005年3月末日にemailの添付fileでLondonに送り、初回の校正は2005年9月初めに、WaterlooのContinuum社に私が持参した。

かくして、その後2回の校正も済み、昨年(2005)の12月下旬には、LondonとNew YorkのContinuum社から私とDickの手になる*Word Grammar: New Perspectives on a Theory of Language Structure*は世界に向けて発売された。しばらくすると、知り合いのアメリカの言語学者から出版を祝う言葉がemailで送られてきた。これも、イギリスの出版社から出版した効果であろう。理科系の研究者の方々は既に実行されている方も多いと思うが、専門分野の如何を問わず、研究成果を世界に向けて発信してみたいかがであろうか。苦しいながらも楽しい経験になることはまちがいない。

(注) Chomskyは1988年、認知科学分野への貢献により第4回京都賞(基礎科学部門)受賞。彼は言語学ばかりではなく、権威主義的な国家を批判する社会評論家・思想家としても有名で*Middle East Illusions* (2003, Rowman & Littlefield Publishers, Inc.)を始めとしてその分野の著作も多い。

(すがやま けんせい：文学部教授)

ご紹介の『Word Grammar: New Perspectives on a Theory of Language Structure』(請求記号 801.5\|S) は2階閲覧室入口の新着図書コーナーに配架しますのでご利用ください。

### 夏季蔵書点検について

8月12日(日)から31日(木)の間、蔵書点検のため2階閲覧室を休室させていただきます。この間、全てのサービスを停止します。(資料の閲覧、貸出、返却および他大学への閲覧依頼、文献・図書の取寄せ依頼 ただし、HPからの文献取寄せ依頼は可能です)

休室前に論文が必要な方は早めにお申し込みください。自習室など3階各部屋は2階休室中も利用できますのでどうぞご利用ください。

ご迷惑をおかけしますがご協力をお願いいたします。

## 平成17年度の図書館利用者サービスをふりかえって

昨年度は利用者サービスの面で大きな変化があった年でした。以下に主な変化を紹介します。

### 1 電子ジャーナルの本格的導入

昨年度からトライアルで利用可能なものもありましたが、正式に下記の4つの電子ジャーナルが学内 LAN に接続したパソコンから利用できるようになりました。(18年度から①、②は学外からリモートアクセスできるようになりました。図書館で申請手続きが必要です。)

①SpringerLink ②EBSCOhost ③The Times Digital Archive 1785-1985 ④ACS(American Chemical Society) が導入されたことで調査・研究のスピードアップと経費の削減が図られたのではないのでしょうか? 他大学への閲覧や、論文取り寄せをしなくても、必要な論文の全文を Text や PDF で見ることができるようになりました。全文は無理でも抄録までは可能な場合もありますし、①と②は論文検索のためのデータベース的機能も持っています。国会図書館の雑誌記事索引、国立情報学研究所のCiNii や国文学研究資料館データベース等が活用できる和文論文に比べ、本学では一部の分野を除き、英文論文は論文検索自体が手軽に出来る環境ではありませんでした。上記4つの導入の意義は極めて大きいと思われます。まだ利用されなかった方はいませんか是非試みてください。

電子ジャーナルについては図書館HPをご覧ください、またはカウンターでお尋ねください。

### 2 閲覧室のリニューアル

「なからぎ」175号でもお知らせしましたように、3月末の蔵書整理期間中にリニューアル工事を行い、二ヶ所に分かれていた参考図書閲覧室を西側に集中させました。検索端末とインターネットコーナーの機器もカウンター前に集中させ、故障や検索方法等に関する質問にもすぐに対応できるようにしました。それから、1万冊分の書架を増設した結果、ゆとりを持って資料を配架できるようになりました。また、スペースの都合で書庫にあった基本的資料も開架に並べて調査・研究に役立つようにしました。

### 3 共通閲覧システム開始

平成17年12月に大学コンソーシアム京都が導入した「共通閲覧システム」に本学も参加しました。これまでと同様、原則事前照会が必要ですが、学生証を持参すれば閲覧可能な大学がこれまでより増えました。(ただし、学生証だけで閲覧可能な大学も、資料が貸出中の場合や保管場所が違うためその時に閲覧できない場合もあります。出来るだけ事前照会をされたほうが無難です。)

詳しい利用方法は大学コンソーシアム京都のHPをご覧ください、またはカウンターでお尋ねください。

### 4 年間貸出冊数の減少

購入図書が少ない中でも、ここ数年右肩上がりに年間貸出冊数は増加していましたが、昨年度は初めて減少に転じました。(表①参照) 貸出冊数枠の拡大(平成14年度に通常貸出を3冊から6冊に

【表①】過去5年間の貸出冊数の変遷

	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度
貸出冊数 (教員・学生)	10,590	13,388	14,764	17,214	16,334

度は初めて減少に転じました。(表①参照) 貸出冊数枠の拡大(平成14年度に通常貸出を3冊から6冊に

変更)効果が薄れたためか、原因はよくわかりません。しかし、購入を停止した外国雑誌費を図書費に振り替えたことにより、4月以降新着図書が途切れることなく本棚に並ぶようになりました。「最近新しい本がたくさん入るようになりましたね」という声もカウンターに寄せられています。新着図書効果?で6月末現在の貸出冊数は前年度同時期をかなり上回っています。

## 5 ますます取り寄せに傾く大学間相互協力業務

現物貸出依頼を除く複写依頼・受付と現物貸出受付は昨年度を上回っています。複写受付は料金相殺制度前の5.2倍になりました。

直接来館利用は依頼・受けともに減少傾向です。料金相殺制度のおかげで取り寄せが手軽になったのと、電子ジャーナルの影響もあるかもしれません。

【表②】過去5年間の大学間等相互協力業務件数の変遷

	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度
複写依頼	1561	1833	1584	2028	2142
複写受付	51	276	345	1450	1801
賃借依頼	123	135	138	137	107
賃借受付	4	40	41	92	118
閲覧依頼	916	1045	734	521	458
閲覧受付	53	90	132	165	154

相殺参加

## 自宅でも電子ジャーナルが利用できます！！

～今すぐリモートアクセス利用の登録手続を～

学術情報のインフラ整備のひとつとして、昨年度から電子ジャーナルの本格導入をはかってきたところですが、図書館のカウンターでいくつかご意見を頂いたり、契約電子ジャーナルのシステム変更でリモートアクセスが可能となり、この度、幅広く学生の皆様にも学習・研究に役立ててもらおうと、リモートアクセス利用の登録を受け付けることにしました。

普段は、授業等で学内利用だけでは利用時間がなかったのではないかと思います。どうか、自宅でも気楽に大いに利用してくだされば嬉しく思います。

登録手続は、図書館2階のカウンターで。質問等は図書館職員にお聞きください。

ただし、通常の学習・調査・研究に利用して頂ければ問題はないのですが、以下の点は厳守して公正な利用をしてください。

### 電子ジャーナルの利用にあたっての留意事項

#### ◆利用できる電子ジャーナル

- 1) EBSCOhost Academic Search Elite (アグリゲータ系)
- 2) SpringerLink (出版社系 Archiveも含めて)

- ① 大量ダウンロードは厳禁です。
- ② 電子ジャーナル記事の閲覧・ファイルのダウンロード、プリントアウトは個人の調査・研究・非商業的な利用の範囲となっています。
- ③ 不正使用が判明すれば、全学利用不能となりますので、著作権等も守って頂き、公正な利用をしてください。

**図書館日誌**

**平成18年度 第1回 図書館運営委員会開催報告**

平成18年度第1回の附属図書館運営委員会が6月20日(火)に本館第1会議室で全委員出席のもとで開催されました。

平成17年度事業報告では、①新規図書購入については追加予算の配当を受け「学び」と「しらべ」の支援を基本とした図書を選書購入して一定の整備をした。②科学研究費補助金間接経費により、懸案であった閲覧室に書架を増設するとともに、参考図書コーナーをこれまでの2箇所を1個所にまとめ、図書検索コーナとインターネットコーナをコントロールデスク前に移設し職員とのコミュニケーションがとりやすいようにする等のリニューアルを実施し、利用者の学習環境の改善と利便を図った。③図書館の図書目録データの業者委託による遡及入力平成17年度で終了し、図書館蔵書の図書は概ねオンライン検索できることになった。残るは、業者委託できない図書、教員研究室等の図書が課題として残ることになった。④図書購入費に大き比重を占めていた外国雑誌の購読中止を含む見直しをしたことなどの報告が行われ、承認されました。

平成18年度の予算については、財政状況が厳しく予算減額される中で図書購入費は181万円増額、昨年同様臨時経費で150万円が予算措置されたこと、電子ジャーナルについては、「SpringerLink」「Academic Search Elite」等を全学共通教育研究経費で継続購読をしていることや、図書館管理システムハードの更新が課題として残っている等の報告がありました。

協議事項では、①図書館運営委員会の選書・電子ジャーナル・自己評価の3つのワーキンググループの継続とメンバー確認。②外国雑誌の購読見直しにより確保した図書購入費の執行については、選書ワーキンググループで協議、決定すること。③本学の電子ジャーナル・データベースの構築について電子ジャーナルワーキングで検討することなどが提案され、いくつかの質疑応答のあと原案どおり承認をされました。

**図書館運営委員会委員名簿**

(平成18年4月1日現在)

所 属	職 名	委員氏名	所属WG
附属図書館	館 長 (文学部教授)	野間 正二	
文 学 部	助教授 教 授 助教授	山口美知代 菅山 謙正 渡邊 伸	選 書 自己評価 電子ジャーナル
福祉社会学部	助教授 教 授 助教授	服部 敬子 津崎 哲雄 川勝 健志	電子ジャーナル 選 書 自己評価
人間環境学部	教 授 講 師 教 授	佐藤 健司 リントガルト正美 佐藤 仁人	自己評価 電子ジャーナル 選 書
農学研究科	教 授 助教授 講 師	井上 雅好 矢内 純太 上田 正文	選 書 自己評価 電子ジャーナル
附属図書館	事務長 係 長	梅村 健一 久保 直弘	

**カレンダ ー**

2006年7月							2006年8月							2006年9月									
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土			
						1			1	2	3	4	5						1	2			
2	3	4	5	6	7	8	6	7	8	9	10	11	12	3	4	5	6	7	8	9			
9	10	11	12	13	14	15	13	14	15	16	17	18	19	10	11	12	13	14	15	16			
16	17	18	19	20	21	22	20	21	22	23	24	25	26	17	18	19	20	21	22	23			
23	24	25	26	27	28	29	27	28	29	30	31			24	25	26	27	28	29	30			
30	31						8/14(月)~8/31(木) 2階閲覧室等休室																
【~7/21(金) 通常貸出実施 (貸出冊数6冊以内、返却期限2週間以内)】 【7/24(月)~9/26(火)夏休み長期貸出実施 (貸出冊数6冊以内、返却期限:~10/10(火))】 【7/17(月)〈海の日〉】							【7/24(月)~9/26(火)夏休み長期貸出実施 (貸出冊数6冊以内、返却期限:~10/10(火))】 【8/14(月)~8/31(木) 2階閲覧室等を蔵書点 検整理のため休室。この間、貸出図書の返却 は、図書館1階西側職員通用口横の【図書 返却ポスト】をご利用ください。】							【7/24(月)~9/26(火)夏休み長期貸出実施 (貸出冊数6冊以内、返却期限:~10/10(火))】 【9/18(月)〈敬老の日〉】【9/23(土)〈秋分の日〉】 【9/27(水)~通常貸出実施 (貸出冊数6冊以内、返却期限2週間以内)】									
<b>開 館 時 間 等</b>																							
通常開館							9 : 00 - 20 : 00																
*****							夏期休業 8/7~9/29 9:00 - 16:45							夏期休業 8/7~9/29 9:00 - 16:45									
休 館 日							土・日・祝祭日																